

**[成果情報名]流水育苗ポット台を利用したイチゴ苗の生育及び収量性**

**[要約]**流水育苗ポット台を利用したイチゴ苗（9cmポット、以下流水育苗ポット苗）は慣行育苗（10.5cmポット、スプリンクラー灌水）苗と比較し、苗質は遜色なく、同等以上の収量が確保できる。

**[キーワード]**イチゴ、流水ポット台、高設栽培、収量

**[担当]**長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

**[連絡先]**（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4318

**[区分]**野菜

**[分類]**指導

---

**[背景・ねらい]**

「流水育苗ポット台」は、イチゴ炭疽病の罹病拡大防止、灌水量の節減効果及び軽作業効果が認められている（2009、2010年度成果情報）。

「流水育苗ポット台」で使用できるのは直径9cmのポットであるが、県内のイチゴ育苗には10.5cmポットが主流で使用されている。そこで「流水育苗ポット台」を利用したイチゴ苗の生育及び収量性について検討する。

**[成果の内容・特徴]**

1. 流水育苗ポット苗は定植前の9月中旬には慣行育苗苗と同等の生育であり、クラウン径10mm程度の大苗が育苗できる（図1、図2）。
2. 定植苗の部位別重量（乾物重）は茎葉とクラウン部は同等であるが、根重は流水育苗ポット苗の方がやや少ない傾向にある（図3）。
3. 流水育苗ポット苗は定植直前の花芽分化、定植後の生育ステージ及び収量については慣行育苗ポット苗（10.5cm）と同等以上である（表1）。

**[成果の活用面・留意点]**

1. 平年比、頂果房の花芽分化が1週間程度遅かった年の成績である。
2. 本試験では試験区、対照区とも炭疽病の発生は認められなかった。
3. 本試験は雨除け施設に熱線カットフィルムを展張した中で育苗しており、鉢土がやや乾きづらい条件であった。
4. 育苗培土にはイチゴベンチポット培土を利用した。
5. 9cmポットは根量が少ない傾向があるため、定植～活着までの灌水管理には十分注意する。また、苗が風により倒れやすく鉢土が乾きやすいため、流水育苗ポット台を利用しない場合は、10.5cmポットの利用が望ましい。

[具体的データ]

1. 供試品種 「さちのか」
2. 育苗条件 高設育苗施設上で育苗し、熱線カットフィルム (R/FR=2.0) を被覆した雨除けハウス
3. 育苗期間 2010年6月1日 (ランナー切り離し日) ~ 9月23日 (定植日)
4. 育苗時施肥量 6/1 N-140mg/株、7/2 N-60mg/株 計 N-200mg/株
5. 収穫期間 2010年11月中旬~2010年5月15日
6. 栽植密度 株間20cm、2条 (700株/a)
7. 区の構成 1区10株、2反復
  - 1) 試験区 9cm黒ポリポット (300ml) を流水育苗ポット台に並べ、専用チューブにより株元灌水
  - 2) 対照区 10.5cm黒ポリポット (500ml) を並べ、スプリンクラーにより頭上灌水

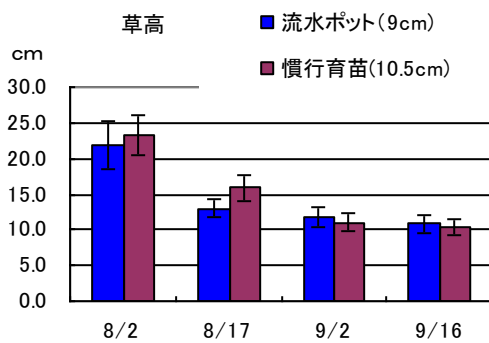


図1 育苗期後半草高の推移 (n=20)

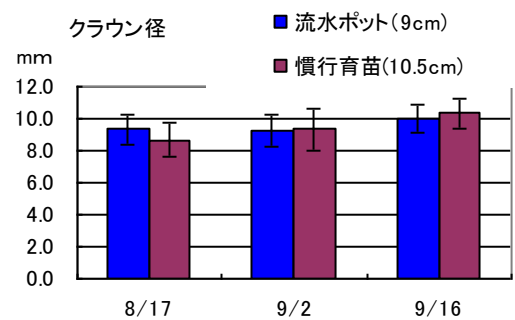


図2 育苗期後半クラウン径の推移 (n=20)

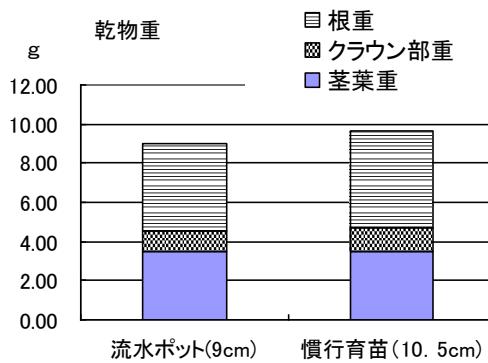


図3 定植苗の部位別重量 (乾物重/株)

表1 生育ステージ及び収量

	定植前日 (9/22) の花芽分化指数	平均出蕾日	平均収穫 開始日	総収量 (kg/a)	商品果収量 (kg/a)
流水ポット(9cm)	1.2	10/20	12/11	485	467
慣行育苗 (10.5cm)	1.5	10/27	12/17	439	421

注1) 花芽分化指数 0 : 未分化 0.5 : 肥厚初期 1.0 : 肥厚中期 1.5 : 肥厚後期 2.0 : 2分割期  
 注2) 花芽分化指数は1区5株調査

[その他]

研究課題名 : 施設野菜栽培環境改善技術の確立  
 予算区分 : 県単  
 研究期間 : 2008~2010年度  
 研究担当者 : 前田 衡